

## 山谷を救うのは「母性」

「ふるさとホテル三晃」から歩いてものの5分とかからないところにある「きぼうのいえ」は、身よりのない人のためにつくられた在宅ホスピスケア対応型の集合住宅である。

突然の訪問だったにもかかわらず、施設長の山本雅基は快く取材に応じてくれた。

1963年に栃木県で生まれた山本は1985年夏の日航機墜落事故にショックを受け、聖職者を

山谷・沖縄・竹ノ塚  
「貧困の連鎖」三都物語



「きぼうのいえ」の施設長・山本氏と妻の美恵さん

志した。上智大学の神学部を卒業後、小児がんと闘う子どもたちの家族に宿泊施設を提供するボランティア活動を始めた。

一時は鬱病にかかり、アルコール依存症になったこともあった。家族に看取られて死んでいく子どもたちは、誰にも看取られず死んでいく山谷のホームレスに比べれば、まだ幸せではないか。そう考えた山本は、看護婦の妻とともに活動を開始し、妻の貯金を元手に銀行から資金を借り、各地のキリスト教教会などからの支援を受けて、02年10月、「きぼうのいえ」をオープンした。

行政の援助はまったくなく、年間1000万円の赤字続きである。それでも何とかやっていけるのは、

篤志家からの寄付などの財政援助を受けているからである。

——「きぼうのいえ」の目的をわかりやすく説明してください。

「看取りの家」と考えてください。山谷で暮らす元日雇い労働者たちは、若い頃に無理をしているので、平均寿命は長くありません。ある統計によると、彼らの平均寿命は64歳だそうです。彼らがすでにその年齢に達していることを考えると、まさに最後のコーナーに差しかかっているといつていいでしょう。事実、7年前にここを開いて以来、100人余りを看取ってきました」

山本の口ぶりは43歳という年齢とは思えないほど落ち着いている。マザー・テレサがインドのカルカッタにつくった「死を待つ人々の家」のような施設が目標だという。

——ここにはどういう人たちが暮らしているんですか。

「病院に入ってもあと3か月といわれているような人たち。そして、『もううちには置いておけない』と病院から追い出されたものの、アパートで暮らすお金もない人たちばかりです」

ここには現在、姉妹施設の「なかよしハウス」と合わせて32人が

入居している。入居費は月に計13万5000円で、支給される生活保護費でなんとかやりくりできているという。この施設を支えているのは、非常勤を含めて15名いる女性スタッフである。彼女たちがかがいがいしく働く姿には、本当に頭がさがった。

——山谷の住人を救う秘策はありますか。

「彼らを救うのは政治でも宗教でもありません。彼らが本当に必要なとしているのは、『貧困を憎む闘争心』ではなく、『母性』なんです。実際、彼らは女性スタッフにケアされると、子どもに帰ったように甘えるんです。彼らはそこに、母や姉、そして果たせなかった結婚

生活を見るんです」

山谷を救うには「母性」しかない。山本のこの意見は、問題をつい社会面や経済面からしか見ようとしないう私にとって、冷水を浴びせかけられたような新鮮なショックだった。

インタビュー後、部屋を見せてもらった。室内はきちんと片付いて、実に清潔だった。各部屋には、ビデオ付きテレビも備わっている。ある部屋をのぞくと、70歳をとうくに過ぎていた白髪の老婆の背中が見えた。老婆は間違いなく、この部屋で間もなく死を迎える。その小さな背中が、ぞっとするような寂しさを漂わせていた。

「日本最貧の島・沖縄」



入所者は女性スタッフに「母」をみる

山谷を歩いて3か月ほどした頃、私は沖縄に飛んだ。沖縄行きの目的は二つあった。一つは内地の貧困問題が、日本一貧しい沖縄にどんな影響を与えているか取材することだった。二つ目は、沖縄にも貧しいホームレスを食い物にする「貧困ビジネス」が生まれているらしい、という山谷で聞いた噂の真偽を確かめてくることだった。沖縄の貧困層の増大問題は、想像をはるかに超えていた。日本共

次号は9月1日(火)発売 総選挙「新しいニッポン」を

暴く！ 定価 350円